

# 小説:『他愛もない恋 — 柔らかな影』



## 第一章: 空白の朝

2026年7月8日、水曜日。ビジネスホテルの遮光カーテンの隙間から、容赦のない夏の光が刺し込んでいた。昨夜は、七夕だった。蒲田の喧騒の中、大森からやってきた客たちに囲まれ、焼肉の煙越しに笑い、飲み、商談という名の「現実」を戦い抜いた。接待を受ける側としての満足感と、脂の乗った肉の記憶が、胃の奥に微かな重みとして残っている。彼らは良い「黒子」だった。場を盛り上げ、予定通りの火曜日を完璧に締めくくってくれた。

そして一夜が明けた、ビジネスホテルの一室。サイドテーブルに置かれた湯沸かし器が、低い音を立てて蒸気を吹き出す。備え付けのカップに、インスタントの粉を落とし、熱湯を注ぐ。立ち上るコーヒーの香りを吸い込みながら、スマートフォンの予定表を開いた。今日と明日。そこには、驚くほど真っ白な空白が広がっている。

「今日明日……珍しく何の予定もないな」

独り言が、冷房の効いた無機質な部屋に溶けた。昨夜の接待で神経を使い果たした反動か、奇妙な虚脱感を覚える。朝食を摂る気にはなれない。一杯の苦いコーヒーだけで、俺の腹は十分に満たされていた。「そうだ、どこかへ行こう。」あてなどない。ただ、この蒲田の熱狂から物理的な距離を置きたかった。身軽な荷物だけを掴み、部屋を出る。フロントでチェックアウトを済ませ、蒲田駅の改札にSuicaをかざした。乾いた電子音が、日常との決別を告げる合図のように響いた。

## 第二章: 中途下車、盛り蕎麦

山手線から総武本線へ。急ぐ旅ではない。俺はあえて、各駅停車を選んだ。扉が開くたびに、夏の熱気と日常の匂いが入り込み、そして去っていく。スマホの画面に没頭する若者や、所

在なげに外を眺める老人。その「ただただ画面に見入るだけの人々」の群れを、俺はさらに外側から眺めていた。千葉を過ぎ、窓の外の景色が濃厚な緑に支配され始める頃、意識は不意に五十年前へと飛んだ。あの頃の自分も、こうして言葉を尽くしていた。だが今、この各駅停車の静寂の中で思うのは、そんな大層な理屈ではない。

こだわりすぎると、夕方のビールがまずくなる――。

不意に浮かんだその言葉に、自分でも苦笑した。五十年の歳月を経て、俺がようやくたどり着いたのは、高尚な哲学ではなく、冷えた酒を旨く飲むための「隙」だったのかもしれない。ふと思いつき立ち、途中の名もなき駅でホームに降りた。駅前には、時代から取り残されたような小さな蕎麦屋が一軒。暖簾をくぐり、「盛りを一枚」とだけ告げた。運ばれてきた蕎麦をつゆに浸し、一気に手繰る。冷ややかな感触が、昨夜の肉の脂を、そして背負い込んできた雑多な思考を削ぎ落としていく。胃の腑が静まり、五感が研ぎ澄まされる。これでいい。空っぽになった俺の身体は、今、銚子の醤油の匂いを受け入れる準備を整えた。夕方のビールを楽しみに、ここでは注文を控えた。

### 第三章: 行き着いた先の「影」

再び電車で揺られ、銚子駅に降り立った瞬間、濃厚な醤油の香りが潮風に乗って鼻を突いた。陽炎が揺れる駅前を抜け、ふと目に止まった「刺身居酒屋」の暖簾をくぐる。夕刻に近い昼下がりの店内は、漁師たちの荒々しい笑い声と、魚の匂いで満ちていた。カウンターの隅に腰を下ろし、品書きを眺める。

「いらっしやい」

その声に、心臓が跳ねた。立ち働く彼女がいた。不自然な訛りの中に、隠しきれない都会の洗練を纏った女。だが俺は彼女を知らない。昨日までの俺の人生に、彼女という存在は一行も記されていなかったはずだ。しかし、俺は「見つけてしまった」のだ。偶然に。七夕の翌日、天の川を渡る代わりに、各駅停車を乗り継いでたどり着いたこの場所で、俺を待っていたかのような織姫を。

「ねえさん……一杯、どうだ」

自分でも驚くほど、真っ直ぐな言葉が出た。彼女は足を止め、俺の目を見た。その瞳の奥に、柔らかな影が揺れる。「……6時まで待って。酔っぱらいを帰すから」

彼女は漁師たちの輪に割り込み、何かつぶやいて回った。やがて一人が席を立ち、しばらくしてもう一人が席を立つ。そして、また一人。迎えに来たろう家族から連れていかれる最後の漁師が、名残惜しそうに振り返る。「あんた。根っこ生えているんだから」。彼女は呆れたように笑う。いつもの光景なのだろう。

### 第四章: 六時の宣戦布告

六時を知らせる防災無線のチャイムが、潮風に乗って遠くで鳴った。彼女がエプロンを解き、不自然な訛りを脱ぎ捨てて俺の前に座った。「お待たせ」その一言は、研ぎ澄まされた都会の響きを帯びていた。無言で彼女のグラスに瓶ビールを傾ける。「酔っぱらいを帰す、だったな」「ええ。覚悟はしてきたんでしょうね？」カチリ、と硬質な音を立ててグラスが触れ合う。喉に流し込んだ最初の一杯は、暴力的なまでに冷たく、そして格別だった。俺たちはしばらく、グラスの底に残った泡を眺めていた。



「水曜日、木曜日。私はここにいるよ」

おもむろに出たその一言で、空白だった二日間は熱烈な意味を持ち始めた。

「ねえ、あなた。ただの旅人じゃないわね。すべてを見透かそうとする目は、あっちの戦場で戦っている男の目よ」 俺は苦笑し、二杯目を注ぐ。「だが、君という影の正体までは、まだ読み解けていない」

「読み解かなくていいわ。夜になれば海が全てを飲み込んでくれる」 彼女がグラスを煽るたびに、白い首筋に夏の残照が影を落とす。俺は経済の数字も責任も、何もかもを忘却し始めていた。

## 第五章:うちの猫と秘密

話はどちらからともなく、ひどく他愛もない方向へと転がっていった。俺の口から出たのは、自宅で留守を守っている「うちの猫」の話だった。「……あいつらは、俺が何を話しても、決して他人に漏らさないんだ。口が堅いからな。今まさに巻き込まれている経済大戦争の愚痴も、物価高騰している餌のことも、全部あいつらの中に吸い込まれていく」 彼女は箸を止めて笑った。「素敵ね、口の堅い同居人。私も、その猫になりたいわ。どこにも持っていかない自信があるもの」 どうでもいい、猫の好物や変な寝相の話。そんな話をしている間だけ、俺たちは何者でもなく、ただの寂しさを分け合う生き物になれる。

「明日も、いるんでしょ？」

彼女が不意に真顔になって訊いた。「予定表は真っ白だ。Suicaもまだチャージは残っている」

## 第六章:ホテルの二次会、あるいは夢の続き

店を出ると、夜風は驚くほど涼やかだった。どちらからともなく、ビジネスホテルへと足が向いた。コンビニで買い足した数缶のビール。小さな円卓を挟んで向かい合う。「……ねえ、さっきの猫の話、続きを聞かせて」 二次会。それは本音を「どうでもいい話」の中に隠して、互いの気配を確かめ合うための時間だ。「あいつらは俺を経営者だなんて思っちゃいない。ただの、飯を

くれる口の堅い同居人だ。それでいいんだ」言葉が途切れると、部屋の冷蔵庫が低く唸る音だけが聞こえた。あるのは夏の夜の静寂と、少しだけ酔いの回った彼女の横顔だけだ。化粧もなければほんの少しだけ髪の色も、お酒でゆるんだ笑顔が妙に艶っぽい。

「明日、木曜日も、私はここにいるよ」

「……知っているよ。だから俺も、ここにたどり着いたんだ」

知っているわけもない、口からのでまかせ。

## 第七章: 投げキッスと、小さな背中

宴には、必ず終わりが来る。ホテルの部屋の時計が、日付が変わる刻限が近いことを示していた。「……さて、そろそろ帰らなきゃ。明日の木曜日も、私は『おばちゃん』を演じなきゃいけないしね」彼女は軽やかに立ち上がり、乱れた髪を指先で整えた。名残惜しさを言葉にするほど、俺たちは若くはない。だが、部屋のドアを開ける直前、彼女は不意に振り返った。「楽しかった。本当に」そして、いたずらな少女のような瞳で、唇に指を当てると、ふわりと空中に「投げキッス」を放った。実体のない、けれど熱を持ったその仕草が、部屋の冷えた空気を一瞬だけ震わせる。

「おやすみ、彦星さま」

ドアが静かに閉まり、カチリと鍵がかかる音が響いた。一人残された部屋で、俺は窓の外を眺めた。銚子の夜は深い。遠くで聞こえる波音だけが、ここが東京ではないことを告げている。

——罪なやつさ

夏の幻に惑わされ、あてもなく行き着いた果てで出会った、柔らかな影。すべてはあの水平線の向こうからやってきた、罪な魔法だったのかもしれない。窓ガラスに映る自分の姿を見る。五十年前の卒論を抱えていた頃の覇気も、蒲田で百戦錬磨の商談をこなす時の威厳も、そこにはなかった。ただ、去っていった女の残像を追い、後ろ髪を引かれる思いで立ち尽くす、一人の男の背中があった。部屋の鏡に映ったその背中は、自分でも驚くほど、小さく、頼りなく見えた。経済の勝ち負けも、社会の変容も、すべてを投げ出してこの一瞬に溺れている。耳の奥に残る「水曜日、木曜日、私はここにいるよ」という声を反芻しながら、俺は静かに、一人ベッドに潜り込む。

これでいいのだ。

著 モトキタクヤ

この作品はすべてフィクションです。